

奥野克巳

『帝国医療と人類学』

(春風社、2006年)

題名が示す通り、本書の主題は医療と人類学である。しかし、本書が正面から挑んでいる課題は決して医療や人類学に限られたものではなく、他の多くの研究に共通する広がりを持っている。それは、西洋近代と土着の実践の交錯をどう捉えるかという問題と関係している。

本書はそれを「癒し」の例を用いて説明している。「癒し」の概念は、はじめ身体器官に生じる病気の治療のみに集中してきた近代医療のあり方を問い直しうるものとして提示された。しかし、近代医療の概念を用いて語られることを通じて、「癒し」は再び近代医療に奉仕する概念へと墮落してしまった。

西洋近代が非西洋地域に及び、近代医療は土着の実践をしだいにその対象に含めていった。このように近代医療を通じて把握されることで、土着の実践は「民族医療」になった。これに対し、近代医療に対抗する価値や近代医療と別の自立した価値を土着の実践に見出そうとする試みもなされてきた。しかし、土着の実践が近代医療の概念を通じて把握されるがゆえに、それらの試みは結局のところ批判の対象であるはずの近代医療の理念を豊かにする結果となってしまう。

本書は、この状況にどのように取り組むことができるのかという問いへの回答の試みである。このような問いは医療に限らず学校教育など他の多くの分野でも見られるものであり、マレーシア

研究でも当然避けて通ることができないものである。これに対して本書は、マラヤのラターやサラワクのプナン人の事例をもとに、西洋近代と土着の実践が会う場で何が起きていたのかを1つ1つ解きほぐし、「民族医療」に近代医療がどのように入り込んでいるかを明らかにする作業を通じて回答を試みている。

*

議論の内容は実際に本書を読んでいただくとして、ここでは本書の研究対象への臨み方についても触れておきたい。植民地文書の中からイギリス人行政官とマレー人の関係を読み取る手法や、サラワクのプナン人が近代医療の不在を問題とするに至る論理の説明など、本書は1つ1つ解きほぐすように論理の筋を辿っている。例えば後者では、プナン人は「不安」だけでは伐採道路の封鎖に正当性が得られないと了解しており、世界市民から正当性を得るために「近代医療の不在」を訴えるという方法をとっているという。

資料的な厳密な論証は難しいかもしれないが、それでも説得力を持つ議論は確かにある。「現地感覚」などとも呼ばれるこの種の議論を、私は研究者の研究対象に対する学問的な思い入れが形になったもの、言い換えれば研究対象への愛情表現の1つとして積極的に捉えている。本書では、控えめながらも滲み出る研究対象への著者の愛情も味わうことができる。(山本博之)